

貝化石の崖に隠れていた「名もなき石切り場」

たぐち きみのり
田口 公則(学芸員)

山北町の鮎沢川沿いには、教科書に紹介された「化石カキ礁^{しよ}」で知られる露頭^{ろとう}があります。その近く、ハマグリ化石が見つかる崖(露頭)に私も何度も訪れていましたが、灯台下暗し。そこが昔の「石切り場」跡だと気づいたのは最近のことです。まさかこんな身近な場所に、石切り場跡があったとは！今回は、この謎多き石切り場跡を紹介します。

地域の石切り場跡を探る

2016年度の特別展「石展」以来、県内産石材がどこで採石され、どのように使われているのか、その調査を続けています。石切り場(石材産地)とその石製品の用途(利用先)の両方の把握が、地域石材の流通や文化を理解する上でとても重要なのです。

箱根火山由来の安山岩など、いわゆる「堅石^{かたいし}」は産地もかなり分かってきました。また、当館地学担当による岩石分析データが石材特定に役立っています。しかし、より小規模^{なんせき}で地域限定的に使われていた「軟石^{なんせき}」は情報が少なく、産地の特定が困難となっています。軟石には凝灰質^{ぎようかいしつ}の堆積岩が多く、見た目では区別が難しいのです。

一方、小田原の久野石、東丹沢の七沢石といった各地の軟石の石切り場跡を実際に見ていくうちに、壁に残る採石の痕跡を見分ける目が養われ、鮎沢川の石切り場跡発見へと繋がりました。

足柄層群塩沢層の小規模石材

今回注目する石切り場は、山北町川西の諸淵^{もろぶち}、鮎沢川の右岸で見つかりました。川岸に面したその規模は、およそ幅14m、高さ4.5mと、石切り場としては



図1. 石切り場跡の全景。

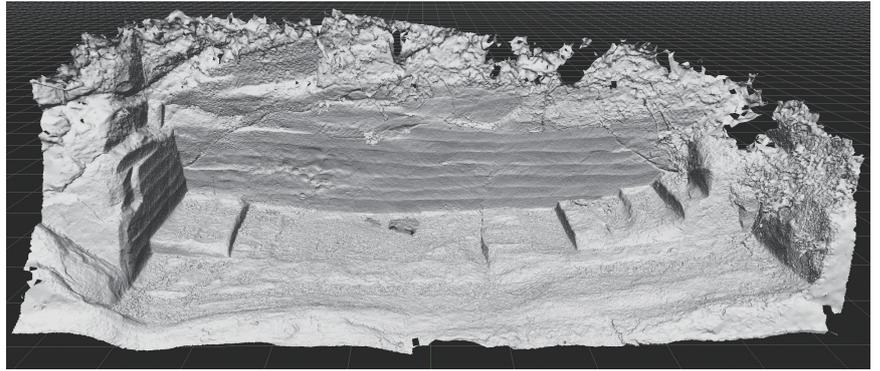


図2. 石切り場跡の3Dモデル。陰影処理により形状がよくわかる。



図3. 石切り場跡にみつかる二枚貝化石。中央に白く湾曲した二枚貝の殻の断面が見える。

極めて小規模なものです(図1)。

石切り場の壁面(左右と奥の3面)をよく観察すると、何段にもわたって斜めに刻まれた筋状の凸凹が見られます。苔等により観察しにくいので、多数の写真から3Dモデルを構築、陰影処理することで採石痕が鮮明になりました(図2)。

この斜めの筋状の痕跡は、ツルハシで掘った痕(ツル痕)で、一段の高さが30~40cm程度あることから、これがおおよそその採石ブロックの厚みだったと思われます。また、斜めの筋の向きから、石工がツルハシを振った方向、つまり作業方向が推測できます。まさに昔の職人の活動を伝える「生痕化石^{せいこん}」のようです。

幻の石材？ ハマグリ化石を含む砂岩

しかし、この石切り場は名前も記録もなく、「〇〇石」といった石材名も不明です。そのため、切り出された石がいつ、何に使われたのか全くの謎なのです。

ここで切り出されたのは、非凝灰質の

砂岩^{さがん}や礫岩^{れきがん}です。一般に、軟石石材として火山砕屑物からなる凝灰質のものが多いのに対し、このようなタイプの岩石を石材にするのは比較的珍しく、地域限定で利用された「地産地消」の可能性が高いと考えられます。

それにしても、なぜ比較的新しい約90万年前の砂岩が、石材に使えるほど硬いのでしょうか。その秘密は、この地域が「伊豆弧衝突」の影響により、地層が強い圧縮を受けて硬くなったことにあると考えています。まさに「大地の力」が生んだ地域資源と言えそうです。

この「幻の石材」の利用を見つける最大の手がかりは、石切り場の地層にも見られる「ハマグリなどの貝化石を含む」という特徴です(図3)。皆さんの周りの古い石垣や庭石などに、貝殻のかけらが入った砂岩や礫岩はありませんか。ぜひ探してみてください。

なお、本報告はJSPS科研費 JP23 K02805の助成を受けたものです。